

2021年7月15日～16日の2日間にわたり神戸国際会議場にて第39回受精着床学会が開催されました。当院からは奥院長、培養士1名が参加し、1演題口頭発表しました。コロナ禍が続く中、2年ぶりに現地開催も行われました。一般演題の多くはZoomを用いての発表形式となり、初めてのハイブリッド開催となりました。

初めてのZoomでの発表となり戸惑うこともありましたが、落ち着いて発表に臨むことができました。自分の発表に対する視聴人数も把握でき、また現地参加より多くの発表を見ることができたので、とても有意義な経験になりました。

当院で発表した演題をご紹介します。

『胚盤胞移植においてICMよりTEを優先すべき』

近年単一胚盤胞移植が主流となり、移植胚の選択の重要性が上がっています。胚盤胞はICMグレード、TEグレードを基に形態評価を行います。これまで移植胚の優先順位の基準が明確ではありませんでした。そこで単一胚盤胞移植において、ICMのグレード、TEのグレードどちらを優先して選択すべきかを検討しました。検討した結果、BL3及びBL4の場合、移植胚の選択においてTEの細胞数がICMの評価より重要である可能性が示されました。BL5ではグレードBB以上で妊娠率に有意差がなく、流産率においても有意差がなかったことから、当院ではTEを胚移植の今後優先基準にしていきたいと考えております。